

大岡昇平『野火』草稿にみる『俘虜記』との分岐、差異化と生成

——「動物的」な「恐怖」「愛情」から「社会的感情」、「生物学的感情」へ——

花崎育代

一

大岡昇平（明42（一九〇九）—昭63（一九八八））の小説家としての本格的なスタートは戦後からはじまった。その出発期の代表作と言える『俘虜記』（昭23・2）と昭26・1。合本は昭27・12）、『武蔵野夫人』（昭25・1）と9）、『野火』（『文體』昭23・12、24・7。『展望』昭26・1）と8）は、昭和28年に発表された「疎開日記」（原題「私の文学手帖」）等を見ればより明らかであるが、ほぼ同時並行的に構想、執筆、発表された。

初出以降現行の右記三作品をみても、その三作品の独立性とともにある連関性重層性はじゅうにぶんに見出し得る。みやすいところであれば、たとえば既に著者自身の「『野火』の意図」（昭28・10）などでも指摘されているような、『俘虜記』において省察された、なぜ射たなかったかというテーマが、『野火』の食人の問題に転換されたであろうことなど。また、『武蔵野夫人』において、復員兵の男主人公である勉が武蔵野の林中にフィリピンの山野を想起してしまったり、『野火』の主人公の田村が武蔵野の自然を思い起こしたりしていることなど。あるいはまた、『武蔵野夫人』で冒頭近く登場する、勉に「似すぎてい」る復員兵の健二が、勉の登場に先立って、強盗犯として射殺される、それだけのためのように登場していることが、『武蔵野夫人』と『野火』の入りくんだ発表順序を考えると得心できること。——この点は既に論じているので詳述は避け

るが、つまり『文體』稿「野火」が、ジャーナリストの「私」による紹介の下で、既に帰還—死去した田村の手記であると、いわばおそろおそろのように差し出されたものの、その田村が無辜の比島女を殺害した場面で掲載誌廃刊のため中断してしま—直後連載開始の「武蔵野夫人」では主人公は復員兵だが、その主人公に似た復員兵健二の（あたかも中断した「野火」田村の贖罪の様な）死と復員兵勉の戦後社会への歩み出しの描出、作品の好評—『展望』稿「野火」で、回想であることを明示せず、まっすぐに戦場の場面からはじめたこと（なおその構成は、途中で無辜の女を殺害することで、カミユを思わせる同時代的不条理の表象ともいべきものともなり得ている）。

このように、少し見ただけでも三作品の重層性は明らかであろう。しかしもちろん読者たる私たちはこれら三作品を、それぞれ独立したものとして読解している。主人公として復員兵が登場するとはいえ、いわゆる戦争物と恋愛物、という全く別ジャンルの作としてさえ捉えているともいえる。

大岡昇平は周知のように、一兵卒として戦地に赴き、俘虜となり帰還した。昭和二十年十二月帰還後、明石で疎開生活を送りつつ、翻訳や批評とともに創作のプランを立て、実作を行っていったのである。その際、復員兵の大岡によるたとえば右の代表的三作品はどのようにおのおの生み出されていったのであろうか。

神奈川近代文学館には大岡昇平の自筆資料が多く収蔵されている。このたび筆者はこの資料のうち、主に大岡戦後出発期の代表作『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』の資料を調査した。右の三作品生成の場を、ここでは『野火』の草稿をみていくことで、その一端を解明すべく考察していきたい。

なお、大岡昇平自筆資料は、著作権継承者により、原稿草稿等の出版は認められていないため、影印の掲載や全文の翻刻はかなわないが、撮影による詳細な調査については許可を得たため、細部の考察が可能となったものである。以下、そのごく一部について引用しつつ検討を加えたい。

二

『野火』草稿として神奈川近代文学館に収蔵されているものは、以下の二十三枚より成る。

- (一) B 5 版 20 × 10 「創元社原稿」用紙九枚（右上欄外に「1」～「9」）。
- 『展望』稿以降の現行『野火』冒頭部に該当する部分。
- (二) B 4 版 20 × 20 「フランス映画」原稿用紙三枚（右上欄外に「26」～「28」）。
- (三) B 4 版 20 × 20 原稿用紙二枚（右上欄外に「41」、「42」）。
- (四) B 4 版 20 × 20 「銀星閣箋」九枚（右上欄外に「77」～「86」、「79」は存在せず）。

なお、「78」、「86」の裏面に横書きで「17 oct 1948」の記載がある。右のように、冒頭部は存在するが、部分的に欠如しており、初出以降活字化された現行本文からしても一部である。

ここでは(四)の「77」～の部分について考えていく。

大岡昇平『野火』草稿にみる『俘虜記』との分岐、差異化と生成

「78」には「医務室」から「頬打の音」が聞こえ「やがて一人の人影が突きだされて来た。「彼が光の方へ振り向いた時、前頭部に角の様な瘤が出ているのを私は認めた。」という一節がある。さらに番号が欠落している「79」の次、「80」には敵弾に攻撃され、「軍医達と衛生兵」が「駆け抜けて行」き、「患者が病棟から溢れ、思ひ思ひの方向に散らかつて行つた。」という一節があり、これらを見れば、この箇所が初出では『文體』昭和二十三年十二月号掲載の一部分、現行では「六夜」から「七砲声」辺りに相当する部分であることがわかる。すわなち、隊を放逐され病院も追われた「私」田村が、結局、病院周辺にたむろする同じような境遇の同胞のもとに「必要」（傍点原文）から戻り、安田と若い兵士（永松）とのやりとりから「若い気の弱い女中の子が、シニツクな女中強姦者の養子となったのを了解した」、さらに「頬打の音」を聞き、「芋一本の兵士」が制裁を受けたことを知り、砲声で目覚め、患者が逃げているのを見、「私」もまたひとり歩き始める、という場面である。

この「77」～「86」と初出以降、単行以下現行では「六夜」～「七砲声」とを読み比べて明らかなのは、結論から言えば、生命の危機にある僚友に対する強い感情がきわめて明瞭に示されているということである。それは「動物的愛情」といったことばでさえ表現されているのである。

部分的に引用しておこう。

(一行二〇字で示す。欄外表記の／は改行。■は判読不能。)

三

・原稿「77」～「78」十行目

「77」

時私のものであつた。たゞ私は^{絶望すもに屈して}自分の生命を軍部の課するに任せることにきめてから、その考へを■忘れてゐた。そして日本軍^中のさういふ考へをする者はなくなつた獄中にしかるなと思つてゐた。まして前線にゐようとは夢にも■思つてゐなかつた。

夜は暗く彼の顔は木の下闇に見えなかつた。私は晝間見た彼の張つた顎、小さい眼^{乾いた}を思ひ出した。さういへば彼の表情■の全体は、肉体の憔悴と同時に、考への疲れを現はしてゐる様に思はれた。

しかし私の中にはこの男にはつきり反撥するものがあつた。多分この男の考へは正しいかも知れない。しかしここではこの戦場では彼の主張する降服の勇氣にはどこか場違ひなものがある。この場合この理^屈は、単なる命^にが惜しい卑怯者の理屈と何等選ぶところはない。

「しかし■私^{皮肉に}はいつた。」
「もし、私は今あなたのいつたことをみなにいつたら、殊にさつきのマラリア患者にいつた。」

☆……上部欄外「兎に角こゝに／集つた行き／場

のない人達の／間では、これだけは／はつきりした／将来の方針を／持つてゐる／唯一の人物で／あつた。」

「78」十行目まで

は自分が彼に反抗する根拠が、^{子供の様な虚栄}単なる名譽心と米軍「敵」といふものに対する動物的な恐怖にすぎないことに気がついてゐた。が、こゝには何か■間違つたものがある。降服といふものと勇氣^(マツ)とのには何処か語呂が合はないところがある。

私は永く眠れなかつた。後に寝てゐる彼もこそりとも音を立てない。すべてかういふ日常的な一種の禮儀正しさは、戦場では夢の様な奇怪さを■つてゐた。

「獄中にしかゐないと思つてゐた」のに「前線に」存在していたという「彼」とは、「降服」を主張する人物である。そして重要なのは、「私」が、しかし、「降服の勇氣」は「場違ひ」であり、「卑怯者の理屈」だと考えている人物として造型されていることである。もちろん『展望』稿以下の現行「野火」にも「降服の用意をし始め」、「こーさーん」と言つて投降しようとする日本兵を見つめる「私」が描かれる場面（初出『展望』昭26・4、「十七 降服の心理」の章、改題「二六 出現」）がある。しかしあくまでもこれは水や食料など生存を保つに極限に至りつつある段階においてであり、理論、理念として余裕をもって主張しようとする、「場違ひ」とうつる場合とは異なる。

「降服」したのか捉まつたのか、というのは「俘虜記」（改題「捉まるまで」）にはじまる『俘虜記』の問題であつた。（さらに言えば神奈川近代文学館所蔵「俘虜記」原稿では、現行本文における、この、まさに「私」が米軍に捉まつて降服か捕獲か問われた場合には「私のプライドが許さない」から「降服」

ではなく捉まったのだと述べる部分が失われていて存在しないのだが^③。その、極限的な、というよりは、俘虜になることについての思索としての「降服」の問題、つまり「俘虜記」的な課題が、草稿段階の「野火」には存在していたことがみてとれるのである。

この草稿「野火」執筆は、前述のように「78」、「86」裏面のメモに拠れば、昭和二十三年十月あたりであるとおもわれる。(該当部分が推敲されたの掲載なつたとおもわれる『文體』第三号は昭和二十三年十二月刊行である。)その時点においては、「俘虜記」(昭23・2)で、なぜ射たなかったのかの省察を行いながら、結論は出ないと記した、そのこと以上に、俘虜とは、俘虜になるとはどういうことかについての考察にまだしの感があったこと、「野火」においても盛り込んで追究しようとしていたことを、じゅうにぶんにかがわせる。

しかし現行『俘虜記』の連作、『野火』をみれば明らかのように、たとえば他者の「降服」の問題は、集団投降を指導した人物についての批評(「新しき俘虜と古き俘虜」、昭25・9)などで展開していくことになる。むしろそれでも十二分に得心はいかなかったであろうことは、芸術院会員辞退の理由に「捕虜の経験があ^④」るので、と述べざるを得ず、戦中戦後を俘虜として生きたであろうことから明瞭である。

そして『野火』は、こうした「場違い」の「卑怯」な「降服の主張」を削除し、僚友のみでない、米兵や比島人でさえそれが自分の命を奪う可能性があるものであつても、「懐かしく」感じ、「この男とともに」生きられるかもしれない、と考えるひろく「社会的感情」を軸に展開していったのだといえる。

倫理的な人間たることは、初出『文體』稿以下現行でも、医務室に盗みに入ると言う「芋一本の兵士」に「いかにも弱い」と考えつつも「結局患

者が困るじゃねえか」と言おうとした点などに示されている。しかし、この草稿段階での倫理性の表出は、襲撃された戦場においておそらく非現実的と言つてもよいほどの高さである。書き手ではない読者の想像は、完全なる論拠を持ち合わせないが、敢えて推測すれば、おそらくはそのリアリティの問題が、こうした記述を削除せしめたものといえよう。あるいはやがて無辜の比島女殺害を行つてしまひ「人交わり出来ない」と痛感しなければならぬ主人公について、不条理の表象というにしても、人物についてあまりに整合的でないという判断が働いたものではあるう。

四

次に、前記文学館に保管されている「86」までのうち、「81」から「85」の「私」が病院を立ち去るまでの記述部分について、掲示と部分的検討によつて考察を行おう。

「降服の勇氣」を主張する兵が、医務室に盗みに入った兵士(「彼」と示される)にアプローチする場面からである。

・「81」十四行目から
「81」

降服の勇氣を主張した兵士が^{彼に}近寄つてその腕を取るのが見られた。二人は暫く揉み合つてゐたが、やがて並んで、だんだん衰へ出した砲火の方へ向つて、確固たる足取りで進んで行つた。私は苦笑した^(マヤ)。

砲声はなほも續いてゐたが、^{この}盆地へは^{相手が}なかつた。砲兵陣地はどこであるか推測がつか

★かないが、敵本軍が西海岸に上陸したのは確実であつた。或ひは艦砲射撃かも知れない。

私は軍医達の逃げた方向を振り返つた。■の盆地彼等はもう駈けてゐなかつたが、この盆地が両側からすばまつた奥に孤立した丘に進つて彼等は振り■向きもせず進んでゐた。少し遅れて三人のわが同僚のちりぢりに進む姿も見られた。

私はかうして四十人の患者と共に取り残されたのを知つた。彼等は病棟から二十間三十三間離れたところに三々伍々力を無失つて倒れてゐた。■方々の林の中へ入つていく姿も見られた。

私の第一になすべきことは医務室の火を消すことであつたが、その■火は最早私の手にあまるのは明瞭であつた。ニツパの葉で葺いた屋根全体が火に包まれ、遺棄された弾丸であらう、間■歌的をいて連続はぢける音がし■て近寄れない。

幸ひ火は病棟へ移らず小屋は焼け落ちた。

☆……右上部欄外「海岸からの距離」

と同時に四十人の患者を養ふべき糧秣の残りも全部焼けたことも明らかであつた。

この時この患者のための希望はたゞ米軍の方へ進んだあの土人若いの兵士が、米軍に事情を告げ■米軍の手によつて救済されることだけであつた。この時私はその若い兵士がいゝことをしつゝあるのを納得せずにはゐられなかつた。私ははそこらに倒れた病兵を助けて病棟に収容しようとした。私は助けを求めて附近に軽い患者の姿を探したが、彼らの姿はどこにも見られなかつた。倒れてゐる者十数人がゐるにすぎない。

私は彼等に肩をかし一人一人病室に導いた。腿に傷を持つ若い兵士は涙と一緒に涙を流して泣いてゐた。或る下士官■は逃げ去つた衛生兵を呪詛した。しかし彼の呪詛言葉の中まごに俗っぽさに私は呆れた。彼も衛生兵の立場にある場合、同じ行動をとることは疑ひを容れなかつた。彼は私に病棟に運ばず安全地帯に連れて行けと命令した。

☆……上部欄外「砲声は止んだ。」

この「83」後半の、逃げた衛生兵を「呪詛」する、軍隊という組織にあつて利己的な下士官を批判的に描出する、といった記述などは、『俘虜記』「パロの陽」(原題「レイテの雨」、昭23・8)の分隊長など俘虜収容所で出会つた同胞が語る、捕獲までの自己中心的な逃亡劇を嫌悪し批判する筆致を思わせる。「私」の問題とともに、他者のありようを見詰め検討

もする『俘虜記』の要素がここには存在していると言える。そして発表された『野火』ではこの他者批判は削除され、より「私」のありようが軸になってきているのである。ここなども、戦場―俘虜―復員を経て、その戦場を舞台とした小説を書く大岡が、『俘虜記』と『野火』とで、作品を分化させていった具体的な過程がわかる部分であるといえる。

「84」

病棟の中には動終始けかずないで、眼ばかり光らせてゐる病兵が十人以上ゐた。彼等■は私に水を要求した。

すつかり運ぶのに三十分以上かゝつた。■

■病兵達は絶えず私を呼んでゐた。彼等の要求するのは武器殊に手榴弾であつた。彼等の或者は銃を持つて入院してゐたが、それは逃げ去つた軽病者衛生兵■が逃げ去(ママ)つた軽い患者に持ち去られてゐた。□□□□私は病棟を廻つて何処にも銃武器がないのを確かめた。私と十緒に林辺に残からされたマラリア患者から私は巧みに銃をそこに置遺棄か■てゐた。

私がもし■病兵を看護しつゝ、こゝに止るならば、私も一緒に「助かる」ことは明瞭であつた。しかしそ■が取私がかうしないことはらな既に決せられてゐた。それは端的にいへば降服の勇氣を論じた兵士の理論に対する反感であつたが、むしろ或る名状し難いものがむしろなほ「敵」に対する動物的恐怖と或ひはなほこの奥地に無数

にゐる同胞への■動的愛情であつた。■

☆……四文字分は前行■部分の推敲を吹き出して「衛生兵か」と訂正した部分。

「85」十一行目まで

私は病兵にきとられぬ様旗を作りに外に出て、そこらにあつた白布を一枚取つて、焼けた木片で十字を書いたき、内の病兵にさとられぬ様に軒端に立てた。これが米兵軍の将校の望遠鏡で望まれるであらう。

私はもう一度各病棟を廻り、銃器のないことを確かめてから、彼等に私が去ることを知らせずにそこを出た。私は以前屯してゐた林辺に帰つて私の銃を把り服装を正してそこを出た。私が生涯で或ひは一番愚かなことをしてゐるのではないか、と■私はふと思つた。

☆……右欄外吹出し「(周知の様に日本の野戦病院は太平洋戦争以来赤十字の印を用ひない)」

このあと「私」は「名状し難いもの」に駆られ、行く手が「死と惨禍」であれ、「行くところまで行つて見よう」と「暗い勇氣と好奇心」を燃やす、というところで、該文学館所蔵の草稿は終わっている。これは先述のように『文體』第三号(昭23・12)掲載部分(現行「七 砲声」の末尾)

に相当する。『文體』で引用しておく。

名状し難いものが私を駆つてゐた。行く手に死と惨禍のほか何ものもないのは既に明瞭であつたが、熱帯の野の人知れぬ一隅で死に絶えるまでも、最後の息を引き取るその瞬間まで、私自身の孤独を見究めようといふ、暗い勇氣と好奇心に私は溢れてゐた。

「降服の勇氣」ではなく、「行くところまで」行こうという「勇氣」なのだという草稿は、その部分の末尾としては同じであるが、初出發表時には明確に「私自身の孤独を見究めよう」とするものだと、自身の問題に焦点化していつており、先にみた他者批判を削除した部分とも相まって、他者との関係は軸になるにせよ、他者と離れていく「孤独な敗兵」「私」―個人の問題の追究が『野火』の主眼となつていくことは明らかである。

そしてやはり特筆すべきは、砲撃を受けた病院を後にする「私」のありようの草稿からの変化である。『文體』稿以下では、なすべきこと（『文體』では「私の今取るべき最も英雄的な行為」が傷病兵の救助であることは「明白」だが、「私自身甚だ意外」ながら「哄笑を抑えることが出来な」と言う経緯をたどる。

しかし作品発表以前の草稿では、「82」「私の第一になすべきこと」が消火活動であること、しかしこれが不可能とみるや、病人を救護し、ここに止まれば米軍に発見され「助かる」と考えつつもこれをせず、病兵が無事に俘虜とされるよう米軍の砲撃を免れるべく赤十字の旗を手作りして掲げ、その上でようやく立ち去る、という経緯が記されているのである。「私」はなお山野にいる僚友を忘れることができない。「敵」への「動物的恐怖」のみならず同胞への「動物的愛情」ゆえ、とまで記して、俘虜になる可能性を放棄して去るのである。

ここには『俘虜記』で抑制されながらも記されている、帰還できなかつ

た同胞への強い感情がみてとれよう。『俘虜記』において「私」は、戦前戦中において、死地に赴かざるを得なくなる状況に何事も賭さなかつた自分と「同じ原因によつて死ぬ人間に同情しないという非情」（「帰還」昭25・10）を作品の原則としながら、「生物学的感情」という別枠を用意することで広島原爆投下に「軍部を憎」む（八月十日、昭25・3）。また帰還途上での俘虜の死者の水葬に右記「非情」で立ち会わないが事後の水葬を「何も見えない」と見続ける（「帰還」）。あるいは、「パロの陽」（昭23・8）において、「私の心を満たし始めていた人間」たる気象隊の兵隊の死に「涙が眼から溢れて来た。」と、戦地での死者を悼む文言を書き込んでいる。いずれも、「敵」への「恐怖」を「そう呼ばうとは欲しない」として書きづらそうに記した「恐怖」をほのみせつつ語り始められ、ともかくも無事に帰還した大岡と呼ばれる「私」―俘虜として帰還した大岡により近い人物を「私」と設定していること抜きには考えられない記載である。

しかし『野火』の「私」田村には、少なくとも当初、傷病兵を見捨てる造型は困難であつた。「孤独な敗兵の裏切られた社会的感情」（「鶏と塩」と「野火」の2、「文體」昭24・7）といった自己の孤独と、社会的感情とを追究していくことになる『野火』は、当初、「勇氣と好奇心」を、「降服」の勇氣を否定し、傷病兵を救護し、その安全を確保した上でなければ「主張」させられなかつたのである。こうした『野火』「私」の造型を偽善的などということばをもって覆うことはできないであろう。ここにはエピソード「たとひわれ死のかけの谷を歩むとも」という主人公自身の問題の追究に当たつても残された僚友の行く手を案じざるを得ない造型としたいという姿勢がきわめて強くうかがわれる。

それでもこれは削除された。このことによつて、恐怖、降服―俘虜の問題は『俘虜記』連作で行おうとし、『野火』は個、孤独、社会的関係、

社会的感情、といった問題に特化されていったといえる。

思索としての「降服」の問題を「動物的恐怖」とともに後退させ、これを「俘虜記」連作での追究の問題とした。それとともに、赤十字社員と見紛うような献身的ともいえる「私」とその僚友への「動物的愛情」を削除し、同胞への「動物的愛情」を『俘虜記』の「非情」の論理の枠の外で「生物学的感情」として表出させたのである。その一方で、『野火』は「社会的感情」に焦点化することで、「俘虜記」と差異化し生成していったと考えられるのである。

注

- ① 拙稿「大岡昇平戦後の出発——『俘虜記』『武蔵野夫人』『野火』」(『国文目白』第23号、昭59・2。平15・10、双文社出版、拙著『大岡昇平研究』所収)。
- ② 拙稿「大岡昇平における〈不条理〉——俘虜・赤十字・カミュー——」(『昭和文学研究』第65集、平24・9)。
- ③ 拙稿「大岡昇平手稿『俘虜記』の考察——僚友・私のプライド——俘虜の〈恥〉——」(『論究日本文学』第96号、平24・5)。

- ④ 「自分には過去に捕虜の経験があり、このような国家的榮譽を受ける気持ちはなれない」(『日本経済新聞』)、「戦わないで捕虜になったのだから、はずかしくて天皇陛下の前に出られないんです、ね」(『朝日新聞』)、いずれも談話、昭46・11・28。
- ⑤ この点については拙稿「大岡昇平『俘虜記』——〈恐怖〉と呼びたくない情念——」(『国文目白』第31号、平3・11。同注①拙著『大岡昇平研究』所収)で論じたことがある。

附記

特記しない限り括弧内の年月日は初出發表時、また大岡昇平の著作からの引用は『大岡昇平全集』全二三巻別巻一(平6・10～平15・8、筑摩書房)に拠っている。なお、活字になっているものに関しては旧字を新字にあらためた。

本稿は文部科学省科学技術研究費補助金採択課題「大岡昇平文学の基礎的および総合的研究——構想ノート・草稿類を含む——」(基盤研究C、研究課題番号21520217、代表 花崎育代)の研究課題の一部を含むものである。

(本学文学部教授)